



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現実の会話における「発話」の知覚 : 発話の何が知覚され、そこで何が起こるのか
Author(s)	名塩, 征史
Citation	Sauvage : 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集, 6, 7-18
Issue Date	2010-03
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/42870">https://hdl.handle.net/2115/42870</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	Sau6_001.pdf



## 現実の会話における「発話」の知覚

### —発話の何が知覚され、そこで何が起こるのか—

名塩 征史  
国際広報メディア専攻 博士課程

#### 1. はじめに

我々が「会話」と聞いて思い浮かべる相互行為は、主に「発話」を中心にやりとりされているように見える。この場合の発話は、「言語使用」の一種として捉えられることが多く、我々が普段何気なく行う会話の成立は、一般的には言語に内在する表現性や利便性に負うところが大きいと考えられているようである。そのため、会話の中に見られる諸現象を、言語学的な視点から説明しようと試みる研究が数多く存在する。しかし、我々が現実の会話の中で経験する様々な事象が、すべて発話される言語的要素の意味機能に帰属するものであるといえるだろうか。言語学的な視点からの会話研究は、ある言語形式が含みうる意味・機能に帰属する事例を会話の中から抽出し、形式的に整然とした言語使用の可能性を確認しているに過ぎないのかもしれない。その結果として、そういった研究の結論に、普段から会話を実践する我々の経験との「ずれ」が指摘される場合も少なくない。

会話の中で我々が普段何気なく行う行為には、言語的な要素だけでなく様々な非言語的要素が含まれていること、そして、それらの非言語的要素が、時に我々のコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしていることは、もはや周知の事実である。すなわち、会話は、それが効率的かどうかに関わらず、事実、言語だけで構成されるわけではないのである。もちろん、会話における多大なる言語の貢献は認めざるを得ない。しかし、現実の会話における言語は、常に然るべき言語規則に則って十分に完成された形で発話されているわけではないのである<sup>1</sup>。

本論の目的は、「言語の形式・意味・機能」を中心に会話を見るのではなく、会話を構成する様々な事象の一つとして「言語の発話」を捉え、他の事象との共起／共同を前提としつつ、発話が会話の進行にどのように寄与するのか、その実態を明らかにすることにある。以降では、その第一段階として、発話を単なる「言語使用」としてではなく、多義的／多面的な行為の一つとして捉え直す。

#### 2. 使用データ

本研究では、3～4名の参加者による会話をビデオカメラで収録したものを分析の対象データとして用いる。その目的は、言語学的な理論から予測可能な言語使用ではなく、実際に使用された発話を、共起する他の事象と併せて捉え、現実の会話における発話の使用実態から、発話の本質を見出すためである。

データとなる会話は、日本人3～4名を一組として行われた、いわゆる「雑談」である。したがって、どの組にも予め会話の目的や話題が与えられておらず、その他、会話中の振る舞いに関して特別な制限は設けられていない。収録時間は各組約1時間で、本研究ではこれまでに10組分のデータを観察・分析してきた。本稿で

具体的に取り上げる事例は、そのうちの3組から観察されたものである。各会話は、隔離された3メートルから5メートル四方の部屋で行われている。部屋の中には、中央に大きなテーブルを配置し、参加者である3名、ないし4名がそのテーブルを囲んで座っている。テーブルの上には茶菓類やティッシュ、お湯を沸かすための電気ケトルなどが置かれ、参加者はそれらの品物を自由に利用することができる。ビデオカメラは、参加者全員とテーブルの上の品物が全て画面に映り込むように配置され、テーブルの端に配置されているステレオマイクが直接つながられている。調査者は、収録開始とともにその部屋を離れ、一時間後に戻りビデオカメラによる録画を停止する。したがって、会話の最中に調査者からの指示や要請は一切行われていない。

会話を行う参加者の年齢は10代後半から30代前半で、そのほとんどが女性である。各組の参加者間の関係性は、基本的には「友人」であるが、年齢にばらつきがある場合や、「先輩後輩」としての関係性が見え隠れする場合もある。しかし、どれも親しい間柄であり、堅苦しい表現や必要以上に気を遣っている様子などは見受けられなかった。

### 3. 会話の中の発話

そもそも「発話」とは何か。言語学的な研究において「発話」を明確に定義するのはほとんどなく、一般的に「発話 (speech/utterance)」という用語は「音声による言語の表出」といった意味で用いられているようである。そのため、「書き言葉 (Written language)」との対比から、発話を「話し言葉 (Spoken language)」として議論する傾向にある。たとえば、Halliday & Matthiessen (2004) によると、英語の話し言葉と書き言葉は、少なくとも現代においては、それぞれを組織するシステムに直接の関係性はなく、書き言葉は発話音の単なる視覚的な再現ではない (p.7)。書き言葉も話し言葉も、独自のコンテキストの中で発達をとげ、多種多様な言語使用場面を相補的にカバーしている。また、「語→句→節 (文) →談話」といった言語学的な「単位」の具現においては、書き言葉では各種の記号 (カンマやピリオド) やスペースが用いられ、話し言葉ではピッチの高低やポーズなどが参照されるといった違いもある。さらに、言語の対人的機能<sup>2</sup> (たとえば「質問」「命令」「感嘆」など) を具現化する上で、話し言葉に最たる特徴とも言える音調 (intonation) の多大なる貢献は無視できない。いずれにしても、話し言葉としての「発話 (Speech)」は、その発話文の意味機能の解釈に、聴覚的な特徴が参照されるという点が最も重要視されているようである。しかし、Halliday & Matthiessen (2004) では、話し言葉も書き言葉も、言語の語彙文法を具現化する表現の一つであることには変わらない (p.7) とされ、「発話=言語化」という発想にとどまるものと言えよう。

一方、相互行為、もしくは対話研究の分野において、「発話」はどのように捉えられているのだろうか。たとえば、Goffman (1981: 22-24) では、上述の言語学的な捉え方と同様に、「発話」を聴覚的な言語音として捉えているものの、「文」や「節」などの文法論的な単位はもちろん、その他のあらゆる単位による区分も考慮しない、単に「言葉話すこと」という意味で「発話 (utterance)」という用語を用いている。同書によれば、自然会話の中に見られる発話が含む文とは、常に文法論的に理想的な要素を十分に備える整然とした (well-formed) 形で表出するわけではない。

そして、ある者が繰り出す発話に対する他者からの反応も、常に文法論的な諸要素を加味して行われているわけではない。Goffman は、自然会話において、ある発話（の連鎖）をその他の発話（の連鎖）と分ける際に、質的に分類された（複数の）行為がどのようにその「場（floor）」を占有しているのかという「ターン（turn（at talk）」の配分に注目した。また、そうしたターンを占める一連の行為は、その後の進行を然るべき連鎖へと方向付ける「ムーブ（move）」であるとし、発話の特徴づける際の焦点を、その言語学的な特徴ではなく、「ムーブ」という行為論的な特徴に求めた<sup>3</sup>。

また、岡田（1996）では、自然な「発話」を『対話者間における個々の「ふるまい」の局所的なやり取りを媒介する「手掛かり（clue）」、あるいは「合い図（cue）」』であると考え、「局所的な手掛かりのキャッチボールにより、二つのシステムが自己組織化した状態、協応構造を形成した状態」を「対話」として規定している（pp.60-61）。「協応構造」とは、「要素間（すなわち、対話者間）での相互作用によって自由度を減じるメカニズム」（p.57）である。つまり、同論では、我々が普段何気なく行う会話は、「秩序」と呼ばれるようなある種の枠組みによってトップダウン式に制御されるものではなく、対峙する参与者間において、互いの振る舞いを参照しつつ次なる自らの振る舞いを調節し、その時その場に適した相互行為の在り方を徐々に獲得していく過程として考えられている。そうした会話において、次なる振る舞いの然るべき方向性を示す「手掛かり」として発話を捉えている点は、Goffman による「ムーブ」の発想に通じるものがある。

以上の内容から、発話には主に二つの側面が備わっていると言える。一つは、発話を含む文の「文法論的／語用論的な意味機能の伝達」という言語学的な側面である。これは発話を含む言語の表現性や利便性を活かし、発話者の思考や意図を効率的かつ正確に伝達するための性質であると思われる。以降、本稿ではこの側面を「言語的な伝達の側面」とし、この側面によって表出する文法論的／語用論的な意味機能を「伝達内容」という用語で表す。

もう一つは、次なる振る舞いの然るべき方向性を示す「手掛かり」として捉えられる発話の行為論的な側面である。これは発話を繰り出す際の身体的な動きや聴覚的な特徴などの要素も含めて、他者がその発話に続く次なる振る舞いの調節に活用するための性質である。以降、本稿ではこの側面を「行為的な手掛かりの側面」、もしくは、単に「手掛かり」と言う用語で表す。

以上、二つの側面を踏まえ、以降では、発話をこれら二つの側面を同時に表出する「両義的／両面的な」事象として捉えることとする。

#### 4. 疑問

普段の何気ない会話において、我々はこの「両義的／両面的な」発話をどのように「知覚」しているのだろうか。本論の焦点は、発話を知覚する側が、その発話を「どのように次なる行為へと利用しているか」ということである。

生態学的知覚論を唱える J.J. Gibson によると、「知覚」は環境に実在する対象が持つ「アフォーダンス」、すなわち、「ある主体が自らの行為を調節するのに利用可能な情報」を抽出する能動的な活動である<sup>4</sup>。しかも、「知覚は経済的なもの（Perception is economical）」（Gibson 1986: 136）であり、「ある対象を他の対象から区別するいくつかの特徴に注意が向けられるのであり、その対象を他のすべて



て 05 の発話を捉えるのは明らかに無理がある。そうした解釈に基づく反応としては、むしろ 06 の D の発話や、07-08 の A の発話のほうが理にかなっていると言えるだろう。05 の発話から明らかなのは、04 の「受けてほしかった」を発話する B の口調が特徴的であるということに C が格別の注意を払い、その発話を取り立てて繰り返したということだけである。05 の発話は、03-04 の発話の言語的な伝達の側面によって表出する伝達内容や文脈的な背景ではなく、その一部に備わる聴覚的な特徴に「手掛かり」を知覚し、それをもとに C が主体的に繰り出した行為であると考えるべきだろう。つまり、発話によって表出する言語的な伝達内容を解釈できなくても、その発話の行為論的な手掛かりの側面が会話の場にもたらす変化を知覚するだけでも、参加者は何らかの行為を繰り出すことができる。目の前で進行する会話への参加に積極的な参加者にとっては、何よりもまず能動的に行為を繰り出すことで、会話の場に自らの存在を参加者の一人として定位させなければならない。そのためには、会話の場における自らの在り方を調節する行為の「手掛かり」を他者の振る舞い（発話）の中に見出すことが最優先されるものと思われる。そして、そうした「手掛かり」は、発話される言語的な伝達内容を理解できなくても、直接的／物理的な特徴の知覚だけで十分に獲得できるものなのである。

以上の分析結果から、本稿では会話における「発話」の活用実態について、以下のような仮説的な問いを立ててみたい。

- (2) 会話において「発話」が備えるべき第一義的な機能とは、言語的な伝達の側面によって発話者の意図／思考を明確に示す機能ではなく、知覚者が自らの次なる動きを調節するための「手掛かり」としての機能なのではないだろうか<sup>6</sup>。

以降では、現実の会話の様相に基づき、(2)の問いについて検証していく。

## 5. 考察

### 5. 1 「発話」の何を知覚するか

発話の言語的な伝達の側面は、発話者の意図や思考を効率的に、且つ正確に伝達する上で非常に有効であるということは否定できない。言語規則を習得し、社会的／文化的な背景と言語との関連を把握する力を養うことで、言語使用を介した効率的な情報交換に熟達することは、我々にとって重要な発達の過程であると言えるだろう。

しかし、前節で指摘したように、相互行為としての会話の場に参加者として自らの居場所を確立する上では、言語的な伝達の側面を理想的に活用した情報交換を常に実現する必要はない。現行の会話に参加するために必要なのは、共に会話を営む他者に自分の存在を認めってもらうことである。そのためには、会話の場に起こる様々な事象に対して、常に自らの態度を示し、他者の振る舞いを受け入れる態勢にあることを、随時、能動的に示さねばならない。ただし、「その時その場を他の参加者と共有している」、「自分が他の参加者にとって相互依存的な関係<sup>7</sup>にある相手である」ということを示すのは、それほど難しいことではない。「声を出す」、「相手の視界に入る」などの原初的で単純な手段であっても、自らの存在を相手に認めさせる事は十分に可能である。我々が普段の何気ない会話の場で目を凝らし耳を澄ます第一義的な目的は、そうした自らの存在を他者に知らしめる「手掛かり」を見出すことな

のである。

事例(3)は、A が参加者全員に共通の知人である Y と酒を飲みに行った時、Y が A の異性との接し方について言った一言を話題にしたやりとりである。

(3) Y の真似をする：データ 090208

- 01 A: でもねー、Y さんに言われたのがねー、なんか A さんシャッター閉める  
02 の早過ぎって言われた[hhhh {B&C:hhhh}]  
03 早い、シャって。[hhh]  
04 D: [hhh]  
05 C: Y さん言ってたん####hh  
06 A: 言われたの、「シャッター閉めるの早くなーい?」って言われ hhhh  
07 {B&C&D:hhhh}  
08 C: 言いそう。hhh  
09 A: そうそう[そう]。  
10 C: [Y さん言いそう]。

01-02 で、A は Y に言われた内容を自分の普段通りの話し方で発話し、その内容に対して他の三者は [笑い声をあげる] ことで反応している。このことから、01-02 の A の発話は、他の三者に理解され受け入れられたものと確認できる。さらに 06 で A は、「シャッター閉めるの早くなーい?」と発話する。この発話は、言語的な要素から判断して 01-02 の発話とほぼ同じ意味・機能を備えるものであるが、01-02 の発話と異なり、Y の話し方 (A の普段の話し方よりも声のトーンが高い、ゆっくりとした発話) を A が真似て発話している。これに対し C は、08 で「言いそう」、そして 10 で再度「Y さん言いそう」と反応を返している。

ここで注目するのは、08、もしくは 10 の C の発話である。これらの発話は、C が直前の 06 の発話の中に何らかの手掛かりを知覚したことで繰り出されたものと考えられる。しかし、その手掛かりが 06 の発話が備える言語的な伝達内容であるとは考えにくい。なぜなら、06 が含むそうした伝達内容は、01-02 の発話を含むものとはほぼ同義であるため、もし C がそうした伝達内容の理解を 08、10 のような反応で示しているのであれば、05 のタイミングでも同様の反応が可能だったはずである。それよりも、「シャッター閉めるの早過ぎ」という内容のコメントが「Y の言いそうなことだ」と C が気づいたのは、「A が Y の話し方を真似た」ことに起因すると考えるべきだろう。つまり、C が 08、10 の発話によって声をあげ、会話への参加を表明できたのは、A が 06 で声のトーンや話速を切り替え「Y の真似をした」という行為的な側面を、06 の発話を構成する他の側面から区別し、取り立てて知覚したことによるものと考えられる。

事例(4)においても、同様の見解が可能である。(4)では参加者 H が自分の結婚パーティーをどこで開いたのかを語っている場面から始まる。

(4) 「開拓」：データ 090401 より

- 01 H: うちの、親の一、田舎の一、庭っていうか、開拓して作った庭が  
02 あって一、{E:開拓?}そこを、私もその開拓手伝ったから一、や

- 03           なんかそこでパーティーやってみよ、  
 04 E: hh 開拓って  
 05 H: hh えだってほんとに、{E:hhh} 木い切ってー、  
 06 E: [開拓したんだ hhh  
 07 H: [あの掘ってー、ほんとに開拓したんだよ {F&G:へー}

01-03 の H の語りは、「自分の結婚パーティーを自ら手がけた庭で行った」という内容を他者に伝えようとしているものと考えられる。しかし、E はその語りの中で H が言った「開拓」という言葉に注目し、02 では、訝しげな上昇調で「開拓？」と発話し、また 04 で [笑い] とともに再度「開拓って」と繰り返し発話している。

E の 02、04 での発話は、H の語りの流れを指示し、その進行を促進するような物であるとは言い難い。04 の発話を機に、H は結婚パーティーの様子を語り始める前に、『なぜ自分が「開拓」という言葉を使用したのか』ということをも E に対して説明する方向へと（一時的に）転換しているのがわかる。つまり、H にとっては取るに足らない「言葉の選択」に E が注意を払ってしまったがために、H は一旦結婚パーティーに関する語りを中断せざるを得なくなってしまったと考えられる。したがって、この 02、04 の発話もまた、01-03 の H の語りが含む言語的な伝達内容を理解したことに直接起因するものではない。E が H による語りの中で行われた「表現の選択」という行為的な側面にある種の違和感とともに知覚し、それを手掛かりとして 02、04 の発話が行われたものと考えることができる。

ただし、たとえある発話を知覚する参加者がその発話の行為的な側面に手掛かりを得ていたとしても、それは言語的な伝達側面に気づいていないとか、言語的な伝達内容を全く理解していないということではない。たとえば事例(4)で、E が「開拓」という表現に違和感を覚えたのは、01-03 での H の語りの意味やそれを包含する文脈を（E の主観によって）十分に把握していたからであると言えるだろう。

しかし、発話に行為論的な手掛かりを得た[知覚・行為]と、その時その場に起こる全ての事象の適切な[理解・把握]とは全く異なる事態であり、そうした[理解・把握]が、必ずしも[知覚・行為]にとって必要なものとは限らない。本論が主張するのは、言語的な伝達の側面によって精緻に外化された伝達内容を適切に[理解・把握]することだけが会話の進行に寄与しているわけではなく、そうした[理解・把握]が各参加者の次なる行為を自然と呼び起こすわけではないということである。普段の何気ない会話の中で、我々は自らをその場に繋ぎ留めるために、あらゆる行為の手掛かりを能動的に探索し続けている。そうした行為の中には、先行する発話の言語的な伝達内容やそれまでの文脈とは全く無縁の要素を知覚し行われるものも少なからず存在しているのである。

## 5. 2 他の事象（行為）との共同・共起

前小節で取り上げた事例では、ある参加者（知覚者）が、他の参加者（発話者）の「話し方（口調）」、および、「言葉の選択」という行為論的な手掛かりを知覚し、自らの次なる行為を調節するために活用する振る舞いを分析した。「話し方」や「言葉の選択」の知覚は、完結した言語表現（文）が備える伝達内容の[理解・把握]を経て達成されるのではなく、むしろ、そうした[理解・把握]に先行しうる即時反射的な活動であり、両者は明確に区別されるべきであると考えられる。しかし、「話し

方」や「言葉の選択」もある意味では言語的な事象であるとも考えられ、少なくとも、発話を構成する重要な一要素である。

本小節では、知覚者がある発話と共同、もしくは、単に共起する非言語的な事象を知覚し次なる行為を調節していると思われる事例を見てみる。

事例(5)では、参加者 H が知人の結婚披露宴に出席した際の出来事について話している。H はその披露宴でブーケ・トスに代わり、ブーケのついた紐を選んで引く催し物について、主に向かいに座っている E と話しているが、その最中に何度も「目の前の紐を掴むように右手をすばやく前に伸ばす」身ぶりを行っている。事例(5)内では【\*】の部分で、後続する下線が引かれた発話とともに、その身ぶりが観察された。

(5) 「ぎゅっ」：データ 090401 より

- 01 H: あれはなんか、じ、あの一、そう言う意味では地味に一、んの、た  
02 だ紐がまわってきて【\*】ふって。hhh{E:ん h一}掴んだだけだっ  
03 たから hhh  
04 E: あそうなの、まわってきた[んだ。  
05 H: [てか、まあ、  
06 まわってきたっていうか、まあ、みんな、大勢、人がいっぱいいて  
07 一、で一、そこにあの一、こうやって、ただ、紐がこう、どうぞど  
08 うぞっ、{E:うんうんうん}とかって{E:はいはいはい}きたから  
09 【\*】ぎゅって。hhh {E&G:hhhh}  
10 E: 【\*】ぎゅって。[hhh  
11 H: [【\*】んって。hhh {E:hhh}  
12 [黙って  
13 E: [【\*】とりあえず握っとけ一みたいな。{H:そう} hhh  
14 H: 掴んだんだけど。{E:hhhhh / G:へ一}

特に 09 から 13 まで、H と E が交互に同様の身ぶりを繰り返しているのがわかる。これは、事例(5)の冒頭で語られた「紐を掴む」仕草を表現したものであるが、06 から 08 までの H の説明を相づちを打ちながら聞いていた E が、09 の H の身ぶりに素早く反応し、全く同じ身ぶりを 10 で繰り返す。この E の反応を受けて、H が再度同じ身ぶりを繰り返し、さらに 13 で E が「とりあえず握っとけ一」という発話とともにもう一度同じ身ぶりを行っている。また、09、10 の【\*】における紐を掴む身ぶりは、「ぎゅっ」という擬態語の発話と共同して一つの事態を表現していると言えるが、11、13 では身ぶりに伴う発話がそれぞれ異なっている。

10 で E によって知覚され取り立てられた「紐を掴むような身ぶり」が、それ以降 13 まで E と H の間で交互に繰り返される様相は、両者の間に、互いを会話する相手として支え合う相互依存的な関係が確立している証であると言える。こうした関係性の構築（もしくは、確認）は、先行する語りの文脈や、各言語表現の伝達内容を適切に理解した結果から予測される規範的な返答である必要はない。上記のように、たまたま際立って見えたある身ぶりを知覚し、そのまま繰り返すだけでも十分に実現可能であり、会話の展開に不可欠な相互作用性を保持することも可能となるのである。

さらに普通の何気ない会話では、先行する発話の連鎖が築く文脈とは全く無縁の事象を知覚し行為を起こす場合も少なからず観察される。

事例(6)では、Kがお湯を注いで作ったチャイ・ラテのシナモンの匂いについて、Jがその飲み物を実際に飲んで確かめようとする場面から始まる。

(6) 「ずっとまぜてるね」：データ 090329 より

- 01 K: そんな強くない[かも、  
02 J: 【飲み始める】 あー、  
03 K: ような気がすんだけど  
04 J: 飲んだらそうでもない  
05 K: うーん、においはすごい  
06 J: [においがそれ  
07 L: [【Iを見て】 hhhh ずっとまぜてるね  
08 J: なんか  
09 シナモン、シ[ナ  
10 K: [【Iを見て】 あっついよね  
11 I: こわい、うん、そ、冷まそうと思って hhhh
- ↓  
【Iは自分の飲み物をかき混ぜ続けてい  
↓

(6)では、01-06までKとJがシナモンの匂いについて話しているが、それを傍らで聞いていたLが、そうした会話の文脈とは無関係に、自分の飲み物をかき混ぜ続けるIの様子を知覚し、07で唐突に「ずっとまぜてるね」と発話する。これに対して、Jはそれまでの会話を続けようとするが、KはIの様子に注意を払い、10でIに対し「あっついよね」と発話する。そして、このKの発話に対し、11でIが反応を返している。この07-11のやりとりによって、I、L、Kの間に、それまでの会話が築き上げてきた文脈とは無縁の相互依存的な関係が一時的に成立することになる。しかし、こうした「逸脱<sup>8</sup>」は、当該の会話の場にとって、決して不利益なものではない。この逸脱によって、それまでほとんど発話せずに現行の会話への参加が不明確であったIが参与者としての立場を示すことができ、また07のLの発話が（期せずして？）Kの新たな行為を喚起した。確かに、10のKの発話が09のJの発話を妨げてはいるが、07-11の逸脱は会話の展開、すなわち、参与者間の相互作用の構築／維持を決して妨げるものではなく、むしろ、促進していると言っても過言ではない。

(5)、(6)の分析を通して、各参与者は発話だけでなく、その発話の内容に連動して繰り出される身ぶり、または、その発話と重なるように共起しながらも全く関連がない事象にまで情報探索の範囲を広げ、時には自らの参加のために、時にはそれと同時に他者の参加を求めて、会話に不可欠な相互作用の構築／維持に努めていることがわかる。会話への参加に活用できる手掛かりは、発話だけから得られるわけではない。参与者は、会話の場に渦巻く種々雑多な事象の中から、その時その場に合わせて利用可能な情報を見つけ出し、自らの行為の調節に役立てている。その事象の渦中であって、常に発話が優先的に知覚されるわけではない。ましてや、その言語的な伝達内容の適切な理解が会話における相互作用の構築／維持にとって常に最優先事項であるとは考えにくい。

## 6. まとめ、および、今後の課題

本節では、4節に示した仮説的な問いに対する答えを、5節での分析、考察の結果に基づいてまとめる。

- (7) 会話において「発話」が備えるべき第一義的な機能とは、言語的な伝達の側面によって発話者の意図／思考を明確に示す機能ではなく、知覚者が自らの次なる動きを調節するための「手掛かり」としての機能なのではないだろうか。(＝(2))

参与者間に相互依存的な関係性を築き、会話に不可欠な性質である相互作用を実現するためには、自らの次なる行為に活用可能な手掛かりの知覚が必要であることは、前節までの議論で示した通りである。

事例(3)(4)の分析を通して、知覚者が「手掛かり」として取り立てて注意を払うものは、発話を含む言語的な伝達の側面であるとは限らないということが証明された。たとえば発話者の「話し方」や「言葉の選択」といった発話の行為的な側面も知覚者が次なる行為の調節に活用する要素として知覚する対象となりうる。もちろん、ほとんどの場合、言語表現が示す内容やその場の文脈が参与者によって理解されているだろうが、言語的な伝達内容を知る／理解する以前に、その発話に目を向け耳を傾けるきっかけが必要である。その意味で、発話にとって最も重要なのは、「無視できないように繰り返されること」である。そうして繰り返された発話が、他者の内に応答責任<sup>9</sup>を生じさせ、会話への参加に利用可能な情報を知覚する対象となるのである。発話が表す言語的な意味機能の[理解・把握]は、知覚されることではじめて可能となる副次的な現象として捉えるべきだろう。

発話が「手掛かり」として機能するためには、その発話に「知覚に値するもの」が備わっていなければならない。それは、事例(5)(6)の分析を通して確認することができる。普段の何気ない会話の場は、発話以外にも多種多様な行為や事象に満ちている。そうした場では、時に目の前の相手が繰り返す発話よりも、聴覚的、視覚的、もしくは心理的な事情によって際立つ事象が起こりかねない。そうした事象と共同・共起する場合に、発話そのものが聞き流されてしまうこともある。事例(5)では、発話そのものよりも、その発話と連動する身ぶりが知覚される例を見た。さらに事例(6)では、共起する発話とは無縁の事象（発話していない参与者の仕草）を知覚し、会話の場に一時的な「逸脱」をもたらす例を見た。それ以外にも、会話を行うどの参与者でもない客体（テーブルの上の品物など）の様子を共起する発話を聞き流して知覚する場合もある<sup>10</sup>。つまり、会話への参加、すなわち、自らの存在を会話の場に示すことを望む参与者が、常に発話だけを見て／聞いて利用可能な情報を知覚するという保証はないのである。したがって、発話者側からできる最も基本的な活動は、共起する他の事象の中に自らの存在が埋もれてしまわないようにするために、自らの発話を「知覚に値するもの」にしようと努力することであると考えられる。

本稿で指摘したような現象は、たとえば外国語教育の場において、共有できる媒介語のない初歩／初級の学習者と教師とのやりとりや、何らかの障害により言語能力に難を抱えた参与者を含むやりとりなど、言語を介したコミュニケーションが困難な状況において、より頻繁に観察されるものと思われる。今後は、そうした特殊

なコミュニケーション場面にもデータ収集の範囲を広げ、より多くの現象を分析する必要がある。また、本稿で扱った事例は、ある程度コミュニケーションに熟達した参加者による会話の一場面であったが、コミュニケーション能力に関して発達途上にある子供のコミュニケーションを観察することで、新たな発見があるかもしれない。また、参加者の年齢や性別、社会的／文化的な背景などの影響を考慮するならば、参加者の性質を固定したより実験的な手続きを経たデータの分析も必要になるだろう。そのような方向性の検討も、今後の課題として挙げておきたい。

### 〈参考文献〉

- Gibson, J.J.(1986) *The Ecological Approach to Visual Perception*. Psychology Press (original work published 1979). (古崎敬他訳『生態学的視覚論』サイエンス社 1985)
- Goffman, E.(1981) *Forms of Talks*. University of Pennsylvania Press.
- Halliday, M.A.K. and Matthiessen, C.M.I.M.(2004) *An Introduction to Functional Grammar, Third Edition*. Arnold.
- Reed, E.S.(1996) *Encountering the World: Toward an Ecological Psychology*. Oxford University Press. (細田直哉訳『アフォーダンスの心理学—生態心理学への道』新曜社 2000)
- 岡田美智男(1996)「対話とは何か」『言語』25-1: 大修館書店 pp.56-63
- 岡田美智男(2003)「ヒトとロボット: 共同性とその成立基盤を探る」『発達』95-24 ミネルヴァ書房 pp.61-70
- 岡田美智男(2008)「コミュニケーションに埋め込まれた身体性—ロボット研究からのアプローチ」『言語』37-6 大修館書店 pp.56-63
- 佐々木正人(2001)「アフォーダンスの構想の源—ギブソン知覚システム論」佐々木正人・三嶋博之編訳『アフォーダンスの構想—知覚研究の生態心理学的デザイン』東京大学出版会 pp.7-45
- 佐々木正人(2008)『アフォーダンス入門—知性はどこに生まれるか』講談社
- 菅原和孝(1997)「関係と交渉のプラグマティックス」谷泰編『コミュニケーションの自然誌』新曜社 pp.369-413
- 名塩征史(2009a)「会話における話題の「逸脱に関する考察—「試行的」な伝達を含む会話の展開分析—」『日本認知言語学会論文集』9 pp.70-80
- 名塩征史(2009b)「会話の展開を左右する各参加者の能動的な「知覚」—生態学的アプローチで捉える会話の実態—」『日本認知言語学会 第10回大会 Conference Handbook』pp.326-329
- 本多啓(2005)『アフォーダンスの認知意味論—生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会
- 宮崎清孝・上野直樹(1985)『視点』東京大学出版会

### (注)

<sup>1</sup> たとえば、自然な対話における発話のプロソディについて調査した杉藤(1997)では、「ごく自然な対話を文字にしてみると、文法的な誤りがまことに多い」(p.281)と指摘しながらも、そうした発話が必ずしも聞く側にとってわかりにくいものであるとは限らないとされている。同論では、非文法的な発話を含むポーズやイントネーションが聞き手の理解を補助していると考えられている。

<sup>2</sup> Halliday & Matthiessen (2004) による「選択体系機能言語学 (Systemic Functional Linguistic)」では、言語の「機能性 (Functionality)」を「言語に内在するもの」と考え、言語

の全体的な構成 (architecture) は、そうした機能の系統 (functional line) に沿って整然とした体を成すと考えられている(p.31)。これに習い、本稿でも文法論的／語用論的な「(意味) 機能」を、「ある言語に内在し、その言語の語彙文法 (ひいては、文の構成) を組織するもの」として捉える。

<sup>3</sup> Goffman (1981: 22-24)。同書では、「ムーブ」について明言を避け、あえて曖昧に定義している (p.24)。本稿では、菅原 (1996) の「さらに換骨奪胎して、交渉のその後の進行を方向づけるように働く一切の言語行為を〈ムーブ〉と呼びたい」(p.392) という記述も参考にした。

<sup>4</sup> Gibson (1979/1986) を中心に、Reed (1996)、佐々木 (2001, 2008)、上野・宮崎 (1985/2008) などによる記述をまとめた。

<sup>5</sup> 事例の表記に関して、“[” が重なった発話の開始時点、“#” が聞き取れない発話、“h” が笑い声、{ } 内は差し挟まれた発話、【 】内が発話と共同・共起する動作／事象を表す。

<sup>6</sup> 本多 (2005) においても、生態心理学的なアプローチによる議論の結果から「言語によるコミュニケーションは、(一般的な用語としての) 情報の伝達を第一の目的とすると考えられることが一般的には多いが、…、そのような考え方は妥当ではない」(p.206) と指摘されている。

<sup>7</sup> 岡田 (2003, 2008) によると、我々の行為は常に相手からの支えを予定しつつ投機的に繰り出されるものである。自分の行為に対して完結した意味や価値を自ら与えられない「不定さ」を備えた我々は、互いに行為を支え合う関係の中に自らの行為の意味や価値を委ねざるを得ない。本稿では、このような関係性を参与者間の「相互依存的な関係」と呼ぶ。

<sup>8</sup> 名塩 (2009a) 参照。

<sup>9</sup> 岡田 (2003) によると、相手の発話に対して「無意識に応答責任を感じるのは、その言葉が誰かの支えを予定しつつ繰り出されたものであることを、自分の身体を介して知っているから」であるとする。同論では、「環境や他者と切り結ぼうとする不定さを備えた身体が、同型の不定さを備えた他者の身体からの共同性を引き出している」と考え、そうした相互行為に関わる自己と他者との同型性を「関係としての同型性」と呼んでいる (p.65)。

<sup>10</sup> 名塩 (2009b) 参照。